

ISSN 1884-7730

安曇野ちひろ美術館
美術館だより

No.121

2026.8.27



いわさきちひろと堀文子 童画の世界

●2026年9月11日(金)～12月15日(火)

 主催：ちひろ美術館
 協力：(一財)堀文子記念館、ナカジマアート、至光社
 後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一財)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、
 信濃毎日新聞、市民タイムス、abn 長野朝日放送、長野エフエム放送株式会社

いわさきちひろ（1918－1974）と堀文子（1918－2019）は同じ年に生まれ、激動の昭和の時代を生きた同世代の画家です。ともに青春時代を戦争のなかで過ごし、戦後の復興のなかで児童出版の発展に大きな足跡を残しました。ちひろが童画家として認められ新しい絵本の表現を求める途上、1974年に55歳で早逝したのに対し、堀は1970年代に決意して絵本を離れ、100歳まで日本画家として絵を描き続けました。本展では、ふたりの絵と人柄を愛する黒柳徹子（ちひろ美術館館長・堀文子記念館代表理事）の視点も交えながら、ちひろと堀の童画家としての仕事を紹介します。

戦後 童画家としての出発点

ちひろが童画家としてようやく認められるようになった1950年代、すでに日本画家として実力をもった堀が、子ども向けの絵雑誌や絵本で活躍していました。堀にとって児童出版の仕事は生活の糧を得る手段でしたが、印刷を通してより多くの人に絵を見てもらえることに意義を感じていました。なにより敗戦後の日本の子どもたちに美しいものを届けたい、幼い心に最初に与える絵は本格的なものでなければとの思いで、堀は童画の仕事に精力的に取り組みます。



図1 堀文子 「おたんじょうび」
絵雑誌「キンダーブック」（フレール館） 1956年

1950年代から60年代、「キンダーブック」（図1）や「ひかりのくに」「こどものせかい」などの絵雑誌に堀とちひろが名を連ね、同じ号にふたりの絵が掲載されることも度々でした。ちひろは同い年の堀を意識していたに違いなく、この時期のちひろの絵には堀からの影響も感じられます。1956年の小学館児童文化賞では堀とちひろが最終選考に残り、絵の未完成さを認めながらも真摯な仕事ぶりが奨励されて、ちひろが受賞します。

絵本の仕事 それぞれの個性

1956年に福音館書店から月刊物語絵本「こどものとも」が創刊されます。編集者の松居直は、創刊号の『ビップとちょうちょう』に堀を、12号の『ひとりでき



図2 いわさきちひろ 「ひとりできのよ」
（福音館書店）より 1956年

画家としてちひろを起用します。初の絵本の仕事を受けてちひろは当時5歳の息子をモデルに全力投球で臨み、同書で童画家としての地位を確立しました。松居は、抒情的な堀と叙事的なちひろの画風に合うよう依頼したと回想しています。

堀は1954年にメーテルリンクの「青い鳥」を原作にした『トツパンの絵物語 青い鳥』に絵を描き、1969年には新装版用に原画を描き直しています。その一場面「夜のぐてん」（図3）では、月夜を飛び交う青い鳥やチルチル、魔法の花園に咲く色とりどりの草花が抽象的な形態と鮮やかな色彩で表現されています。

「色と形と幻想を折り込める絵本の世界は、他のどの出版物よりも次元の高いものとして私の心を動かせた。絵描きとして何一つ大切なものを犯されない努力に値する仕事」*1という堀の絵本は、優れた色彩感覚と斬新な画面構成によってモダンな印象を受けます。

ちひろも1969年に『青い鳥』を手がけています。夜の国の場面（図4）を、ちひろは主人公の子どもたちに焦点をあてて描きました。チルチルとミチルを画面上から飛び込むように配置し、手の仕草や顔の表情からも、青い鳥に夢中になるようすがいきいきと伝わってきます。物語の同じ場面を描いていても、ふたりの表現には大きな違いが見られます。

至光社の「感じる絵本」

「感じる絵本」と称して新たな絵本づくりを目指した至光社の編集長武市八十雄



図5 堀文子 「き」（至光社）より 1968年

も、1968年に堀とちひろ、それぞれと組んで絵本を企画します。堀が描きためていた木や野原のスケッチに谷川俊太郎の詩をつけた『き』（図5）を、ちひろは初の自作の絵本『あめのひのおるすばん』を制作します。自然へ深いまなざしをむける堀と、子どもの心の機微を描こうとしたちひろ。画家の個性がいかになく発揮された至光社の絵本シリーズに、ちひろは『あかちゃんのくるひ』（図6）など自作の絵本を毎年1冊のペースで計6冊、堀は1972年に自ら文も手がけた『みち』を発表しています。至光社の絵本は国内外でも高く評価され、ちひろは1971年に描いた『ことりのくるひ』で1973年にボローニャ国際児童図書展でグラフィック賞を受賞します。

堀も同賞を1972年に『くるみわりにんぎょう』（学習研究社1969年）で受賞するなど絵本画家として異才を放つ存在でしたが、日本画の制作に専念すべく1970年代以降は絵本の世界から離れます。

ちひろは「童画は、けしてただの文の説明であってはならないと思う。その絵は、文で表現されたのと、まったくちがった面からの、独立したひとつのたいせつな芸術だと思うからです」*2と記し、絵本表現の可能性を追求し続けました。

本展では1940年後半から70年代に描かれた絵雑誌や絵本の原画、印刷物などの資料を展示するほか、画家のことばから、ふたりの根底に共通する平和への思いを浮き彫りにします。（山田実徳）



図3 堀文子 「トツパンの絵物語 青い鳥」
（新装版、フレール館）より 1969年



図4 いわさきちひろ 「青い鳥」（世界文化社）より 1969年



図6 いわさきちひろ 「あかちゃんのくるひ」
（至光社）より 1969年

*1 堀文子「絵本と私」季刊「ひろば」冬期号40（至光社）1968年
 *2 いわさきちひろ「童画と私」なかよしだより（講談社）1964年

絵本の舞台を訪ねて 赤羽末吉の日本一周

●2026年9月11日(金)～12月15日(火)

主催：ちひろ美術館 特別協力：赤羽家 協力：BL 出版、あかね書房、偕成社、福音館書店
後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会

赤羽末吉（1910～1990）の絵本は、旅と切り離せません。本展ではスケッチや資料から赤羽の旅と絵本づくりのつながりをひもとき、その魅力を紹介します。

日本の風土

赤羽は、22歳からの15年間に中国東北部で暮らしていました。帰国すると、『スーホの白い馬』（1967年）に描いた乾燥した黄色い大陸の風土とは対照的な、湿り気を帯びた緑豊かで自然あふれる日本の風土に魅せられます。後年、「日本の文化のすべては、その湿度を前提として生まれたもの」*1として、独自の風土論を展開しました。また、「こうした独得の風土、生活から生まれた独得の文化を、しっかりと追及して、絵本を通じて子どもに伝えてゆきたいというのが、私の考えです」*2とも語っています。

『そら、にげろ』（図1）は、旅人が着物から逃げ出した鳥を追いかけて旅をするナンセンス絵本です。しだれ桜の咲く春から始まり、稲妻の走る夏の雨、秋の柿、はた雪の降る雪山、そしてまた春の景色へと画面が移り変わります。なかには、葛飾北斎《富嶽三十六景 凱風快晴》や酒井抱一《夏秋草図屏風》を思わせる場面も登場し、日本の豊かな風土を表した絵画作品の引用も織り交ぜて、美しい風景が展開します。

カゲリ的美を求めて

現存する70冊もの赤羽のスケッチブックのうち10冊には雪国が描かれています（図2）。1947年に帰国した赤羽は、生活が落ち着き始めた1954年に初めて雪国（秋田・新潟）を訪れました。その後も冬になると1週間から10日かけて東北地方を中心に雪国を巡り、膨大なスケッチや記録を残す旅を10年近く続けました。



図2 赤羽末吉 越後湯沢 1956年2月23日

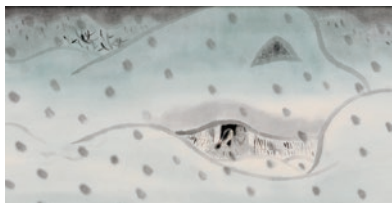


図3 赤羽末吉 「つるようぼう」（福音館書店）より 1979年



図1 赤羽末吉 「そら、にげろ」（偕成社）より 1978年



図5 赤羽末吉 1973年12月12日（推定）

特に3度目となった1956年の雪国取材（新潟）では、乗車していた飯山線が吹雪により足止めされ、雪の恐ろしさを痛感します。一方で、雪国の人々からの施しを受け、実際の生活や子どもたちの遊び、伝統文化にも触れ、収穫の多い旅になったとも語りました。

こうした雪国通いを経て、赤羽は日本の美しさは湿気、^{かけ}陰りの美しさにあると発見し、それを表すために水気を含んだ筆で和紙に墨をにじませて描く墨絵の表現を追及します。こうした試みは、最初の絵本『かさじぞう』（1961年）につながり、やがて雪の表現の最高峰ともいえる『つるようぼう』（図3）に結実しました。

歴史・神話の舞台

4年越しで制作した『源平絵巻物語』シリーズ（1971-73/1979年、全10巻）は、源平合戦の主要なエピソードに加え、運命に翻弄される源義経の人生をたどった物語です。赤羽は、過去の絵画や文学作品を参照しますが、『第五巻 ひよどりごえ』（図4）の逆落としの資料には納得のいくものがないとして、実際に舞台となった兵庫県神戸市にある鉄拐山を訪れています。現地で須磨寺の住職に取材し、山の東南斜面を蛇行すれば不可能ではないと結論付けた赤羽は自信をもって本作に挑みました。しかし「絵本はドラマをかくので、図鑑をかくのではない」として、鎧などの正確さに固執せず、ときには馬の躍動感やいきいきとした人物の動きをあらわすことを優先して簡略化するなど、最終的には絵本としての見せ方を重視して、柔軟に表現しました。



図4 赤羽末吉 「源平絵巻物語 第五巻 ひよどりごえ」（偕成社）より 1971-73/1979年

南国の色彩

1973～74年にかけて、赤羽は沖縄県・慶良間列島を訪れました。このときのスケッチブックには「あの水の色はなんだろう。深い底にあるエメラルドが表面にかがやくようにういている」と記され、南国の色彩を目にした画家の感動が伝わります。同じスケッチブックには夕暮れの空の絵（図5）が残されており、現地の鮮やかな色彩を紙にとどめようと筆を走らせた姿が目浮かびます。この経験は『黄金りゅうと天女』（1974年）に生かされ、朱とエメラルドの色彩が鮮やかに物語を彩っています。また、1974年頃には『ほうまんの池のカップ』の取材のため、鹿児島県の桜島を訪れています。この旅の印象から「南国らしく光線の強さをだすため、画面の白を極力生かし、線を細くして、ガラガラとハレーションを起こした感じにする」*3として、新しい光の表現も試みました（図6）。



図6 赤羽末吉 「ほうまんの池のカップ」（BL 出版）より 1975年

旅する画家

赤羽は1948年からGHQの民間情報教育局（CIE）で、1952年から1969年まではアメリカ大使館で働いたサラリーマン画家でした。仕事柄出張も多く、そこに休暇をつけて、取材旅行に限らず日本各地を訪ね歩いています。また、1965年頃に完成した長野県・黒姫高原の山荘にも毎年のように通いました。

残されたスケッチ群には、そうした赤羽の旅の足跡に加え、民話や伝承など物語の題材となる土地を訪ね歩き、見聞きし、肌で感じた感動が息づいています。旅にまつわる絵本とともに、赤羽の絵本づくりを支えた膨大なスケッチの一端もお楽しみください。（高津つぐみ）

*1 *2 赤羽末吉「国際アンデルセン賞画家賞授賞式挨拶」 1980年
*3 赤羽末吉「絵本よもやま話」（偕成社） 1979年

ちひろ美術館コレクション 波にゆられて舟の旅

●2026年9月11日(金)～12月15日(火)

主催：ちひろ美術館

ちひろ美術館コレクションのなかから舟の旅をテーマに作品を展示します。絵本画家が描く大きさもデザインもさまざまな舟とともに、舟が浮かぶ波の表現にも注目してご覧ください。



図1 タチヤーナ・マーヴリナ (ロシア)
『空飛ぶ船』 1961年

ロシア民話「空飛ぶ船」(図1)は、同じ名前だけれど能力の異なる、7人の兄弟の物語。王の望みを叶えるため、末息子と兄弟が隣国の王女を迎える場面です。マーヴリナは王女が乗る大きな船をのびやかな線で描き、さまざまな模様を使って場面を彩っています。

『ひかりがうまれたとき』はヴェネズエラのオリノコ河畔に暮らす、ワラオ族に伝わる物語です。世界は初め、暗闇に包まれていました。ワラオ族の娘は「光の主」から光を分けてもらうため、暗闇



図2 イレーネ・サヴィーノ (ヴェネズエラ)
『ひかりがうまれたとき』(新世研)より 1994年

のなかひとりクリアアラ (カヌー) を漕ぎだします(図2)。広大な熱帯雨林と大河、そこへ小さなカヌーを進める女性の勇敢な姿が印象的な作品です。



図3 初山滋 (日本) 『一寸法師』
(普及社/誠文堂)より 1928年

御伽草子の一編、「一寸法師」を初山滋が描いた作品です(図3)。お椀の舟に箸の櫂。都へ向かう一寸法師を、繊細な線で描いた波がいにぎいます。

(矢野ゆう子)

●活動報告

2026年 6月12日(金) ザ・キャビンカンパニーアーティストトーク

6月13日(土) ザ・キャビンカンパニー絵本づくりワークショップ「わたしのかいじゅう」

共催：松川村図書館

ザ・キャビンカンパニーの絵本『がっこうにまにあわない』『ゆうやけにとけていく』の原画を紹介する展覧会「ようこそ！ザ・キャビンカンパニー 新収蔵作品展ーがっこうにまにあわない・ゆうやけにとけていくー」の開催にあたり、アーティストトークとワークショップを開催しました。2日間の活動を報告します。(山本理乃)

6月12日(金) アーティストトーク

松本猛が聞き手になり、展示室でザ・キャビンカンパニーの阿部健太朗さんと吉岡紗希さんに、おふたりの制作活動についてお話をうかがいました。

絵本の読み語りでは、『がっこうにまにあわない』の電車がなかなか通りすぎず「ゴンゴンゴンゴン…」と踏切が鳴り続けるシーンに笑いが巻き起こりました。

『草枕』『走れメロス』などの引用にもふれながら、この絵本のテーマである時間に関して語られました。「不安なことや悩み事があるなかで、自然物と芸術を見たときに、それらを忘れる瞬間があるんですね。そういう時間を、金環日食の場面であらわしたかった。」

『ゆうやけにとけていく』では、本作をつくらうと思ったきっかけが語られました。コロナのさなかに友人が亡くなったこと、残された人にただ寄り添う絵本として、なにもない一日を肯定する絵本

の構想が浮かんだといいます。彼らが制作をするうえで大切にしている「子ども」「絵本」についても話が進みました。「子どもは『人間の核』であって、大人になった人のなかにもずっとあるものであると思っています。絵本は『子ども』というものが入り込んだことによって、すごく独特な芸術になっているような気がします。子どものときに読んでだんだん卒業していくという通念がありますが、絵本は本当は、ずっと人生に伴走してくれるもの。子どもが見てもおもしろいし、大人が見てもまた違うおもしろみが出る。そんなものをつくりたいと思っています。」



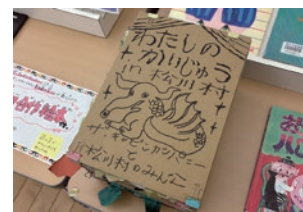
6月13日(土)

ワークショップ「わたしのかいじゅう」

翌日、松川村多目的交流センター すずの音ホールにて、松川村図書館との共催事業としてワークショップが開催されました。地元の松川村の子どもたちや、ザ・キャビンカンパニーのファンの方々38名が参加しました。参加した子どもた

ちは、ザ・キャビンカンパニーのふたりと会話をしたり、家族で協力したりしながらさまざまな素材を台紙にはりつけて自分のかいじゅうをつくり上げ、最後に参加者全員のページをつなげた大きな絵本が完成しました。ザ・キャビンカンパニーから参加者へのメッセージです。

「絵本のなかの『かいじゅう』は、みんなの頭と心のなかをかたちにしたものです。ぜひほかの人のページを見てみてください。自分と似ているところ、違うところ、こんな人だったんだと感ずることがあると思います。その感じる心を大切にしてください。作品とふれ合うということは、人間の心とふれ合うということです。たくさん本を読んで、たくさん芸術作品にふれて、いろんな人の気持ちを感じとれる人になってほしいと思います。いろんな考え方ができるやわらかい心を持ってほしいと思います。」



完成した絵本「わたしのかいじゅう」は、松川村図書館で7月末まで展示されました。

ひとこと ふたこと みこと



4月13日(月)

12年くらい前に祖父と来たちひろ美術館。当時は中学生だったので、ずっと思い出に残っている場所です。そんな祖父は先月亡くなりましたが、祖父との大切な思い出の場所に、大切な人といっしょに来ることができました。ちひろ美術館は私にとってずっと大切な思い出の場所です。

4月29日(水・祝)

ヴィルコンは、以前ボローニャ絵本原画展で出会って大好きになった画家。彼の中の絵の歴史がよくわかりました。あくなき追求……すばらしいです。

6月19日(金)

はじめてちひろ美術館に来ました。トモ工学園の小林先生の「みんないっしょだよ」ということば

がとても心に残っています。これからも、このことばを大事にしていきたいです。戦争のない平和な世界を求めて。(◎)

6月28日(日)

トットちゃんの絵はかわいらしく、とても印象に残っています。もうひとつ印象に残ったのが《焼け跡を見つめる少年》という絵で、墨で塗っているだけなのに、とても悲しさや切なさを感じました。

6月28日(日)

Very beautiful and touching exhibition. Thank you so much for this beautiful experience. I wish my children were here to see this with me.

とても美しく、心に残る展覧会でした。素晴らしい時間をありがとうございました。子どもたちもい

っしょに見ることができたらどんなによかっただろうと思いました。

6月30日(火)

「あなたは本当はいい子なんだよ」と多くの子どもたちに伝えてあげようと思います。これから生まれてくるお腹の子にも伝えてあげたいです。(群馬の先生)

7月25日(土)

戦争が終わり平和といわれるときが80年も続いてきたのに今とても危うい事態になっています。二度とおきてはいけなくとも誰かが思っているはずなのにどうしてその方向に行くのでしょうか。政治は大切です。ひとりひとりが自分ごとに考えるような教育がなされるには……ちひろさんの絵、絵本、おもしろい、たくさん子どもたちに伝わりますように。

美術館 日記



3月30日(月) ☀

現代アーティスト・鴻池朋子さんが制作したオオカミベンチ《Four Seasons》が安曇野ちひろ公園にやってきた。鴻池さんを迎えて開いたささやかな歓迎会には、鴻池さんがつくった指人形たちも参加！ 和やかな雰囲気の中、《Four Seasons》が安曇野の四季からインスピレーションを得て制作されたことが語られた。歓迎会に集った人々は、腰掛けたり、よじ登ったりと、オオカミベンチとのふれあいを楽しんでいた。



4月19日(日) ☀

29年目の開館記念日。今年は企画展に関連し「ヴィルコンデー！」

として、ユゼフ・ヴィルコンの絵本の読み聞かせや、ヴィルコンと親交の深い松本猛によるギャラリートーク、短編映画『ヴィルコン88』の上映会など、さまざまなイベントを開催した。絵本カフェで提供した、ヴィルコンの出身地・ポーランドのお菓子「ポンチキ」も好評を博し、完売となった。

5月3日(日・祝) ☺

憲法記念日にあわせ、絵本の部屋に憲法カードコーナーを設置した。ちひろ美術館の思いを伝える活動の一環として制作された憲法カードには、ちひろの絵と日本国憲法前文、第9条が印刷されている。多くの方が手に取り、憲法への関心の高まりが感じられた。平和への思いを分かち合う一日となった。

6月4日(木) ☺

地元・松川中学校の1年生とボラ

ンティアのみなさんにより、安曇野ちひろ公園の大花壇の定植が行われた。前日の台風でぬかるんだ足元に気をつけながら、小さな苗をひとつひとつ丁寧に植えていた。

6月12日(金) ☀

初夏らしいさわやかな天気の中、夏の展覧会が開幕した。オーブンセラモニーでは、トットちゃん広場10周年を記念して制作された記念切手の贈呈式も行われた。

7月12日(日) ☺

地元の社会福祉協議会のみなさまが来館され、ザ・キャビンカンパニーが絵を手がけた紙芝居『こたろうとりゅう』(童心社)の読み聞かせをした。長野県に伝わる「泉小太郎伝説」をもとにした親しみ深い物語は、ザ・キャビンカンパニーの鮮やかな絵とあいまって、新鮮なおもしろさを届けていた。

新収蔵 作品紹介⑯

いわさきちひろ
直筆原稿
「たけくらべの诗情」
1971年

花と子どもの作品で愛されるいわさきちひろは、自作絵本の文や雑誌、新聞への寄稿、日記や手帖などに、さまざまなことばを残しています。現在ちひろ美術館では、把握できるすべてのちひろの「ことば」を整理し、目録にまとめる作業を進めています。

そんな折、有隣堂から一通の手紙が届きました。情報紙「有隣」の休刊にともない、同紙のために執筆された原稿を著作権継承者に返却している、とまさに渡りに船のご連絡。そしてご返却いただいた原稿は、私たちがこれまで読んだことのないものでした。

原稿は、樋口一葉の「たけくらべ」の絵に取り組むちひろ自身の

意気込みから始まります。「たけくらべの絵を描きたいと思いついてから、折にふれて一葉の資料などに目をとすようになった」主人公公美登利の結っている髷の前髪やたば*の「可愛らしいふくらませかたを、あれこれとスケッチ」した。そして、評論家が「一葉文学を二流と呼ぶことにふれ、「私たち童画家がいつも絵描きの中では二流どころだと(中略)思われている」、と世間による格付けに言及しています。画壇の動向を意に介さず「私は私のペースで、その想いのなかで、わたしのたけくらべを描いていこう」という、ちひろの強い決意とともに、文章は締めくくられていました。

今秋刊行の『いわさきちひろことば目録』には、このことばを含む163編を収録予定です。

(中平洋子)



*「たば」とは、日本髪の後頭部に張り出した部分のこと

安曇野ちひろ美術館 イベント予定 各イベントの予約・お問い合わせは、安曇野ちひろ美術館へ。

下記イベントおよび展覧会の会期は予告なく変更になる可能性があります。

最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください。お問い合わせください。

TEL.0261-62-0772 chihiro.jp 各種 SNS も随時更新しています

〈展覧会関連イベント〉

●「いわさきちひろと堀文子」展 オープニングトーク 中島良成×松本猛

○日時：9月11日（金）13：45～14：45

○参加費：無料（入館料別）

○申し込み：不要

30年にわたり堀文子の画業を支えた中島良成さん（ナカジマアート）と、いわさきちひろの長男・松本猛（ちひろ美術館常任顧問）が、同じ年に生まれたふたりの画家について語り合います。

●「赤羽末吉の日本一周」関連イベント 赤羽茂乃講演会「赤羽末吉の日本の旅」

○日時：10月10日（土）14：00～15：30

○参加費：会場 700円（入館料別）・オンライン 700円

○定員：会場 30名 オンライン 100名

○申し込み：要事前予約（公式サイト/TEL./Peatix にて）

赤羽末吉の三男の妻で、評伝『絵本画家 赤羽末吉—スーホの草原にかけの虹—』の著者である赤羽茂乃さん。赤羽末吉の足跡をたどってきた茂乃さんが、赤羽の日本の旅と絵本の関わりについて語ります。

※Peatixにてお申し込みの方に限り、収録動画の見逃し配信（1ヶ月間）をご覧ください。

●「いわさきちひろと堀文子」展スライドトーク

○日時：11月3日（火・文化の日）14：00～15：00

○参加費：無料（入館料別）

○定員：30名 ○申し込み：不要

担当学芸員が、絵雑誌や絵本など、童画の仕事を中心に、いわさきちひろと堀文子の人生と作品を紹介します。

●ちひろの水彩技法体験 ことりのミニカードをつくろう！

○日時：11月29日（日）

11：00～12：00、14：00～15：00

○参加費：500円（入館料別）

○定員：各回12名

○申し込み：要事前予約（公式サイト/TEL. にて）



●ギャラリートーク

○日時：9月19日（土）・10月17日（土）・11月21日（土）

14：00～「いわさきちひろと堀文子」展

14：30～「赤羽末吉の日本一周」展

○参加費：無料（入館料別） ○申し込み：不要

〈会期中のイベント〉

●ちいさなおはなしの会 at 絵本カフェ

○日時：9月27日（日）11：00～11：20

○参加費：無料（入館料別） ○定員：20名 ○申し込み：不要

●あかちゃんとおでかけしよう！ ファーストミュージアムデー

○日時：11月19日（木）10：00～11：00

○参加費：無料（入館料別）

○定員：10組

○対象：0～2歳児と保護者

○申し込み：要事前予約（公式サイト/TEL. にて）



●長野県民感謝デー

○日時：12月6日（日）10：00～17：00

長野県にお住まいの方は、入館が無料になります。※受付でご住所のわかるものをご提示ください。

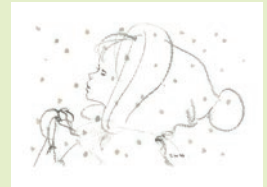
●ちひろの誕生日会

○日時：12月13日（日）

10：00～17：00

12月15日のちひろの誕生日に先立ち、ちひろの誕生日会を開催します。絵本のじかんやギャラリートークなど人気のイベントを行います。

12月13日～15日にご来館の方には、ちひろのこぼれカードをプレゼントします。



いわさきちひろ 雪のなかで
1972年

●絵本のじかん

○日時：10月3日（土）・11月7日（土）・12月5日（土）

11：30～12：00

○参加費：無料（入館料別） ○申し込み：不要

安曇野ちひろ公園 イベント

最新情報：chihiro-park.org

●おでかけホリデー

○日時：9月26日（土）・10月24日（土）10：00～15：00

○お問い合わせ先 安曇野ちひろ公園 TEL.0261-85-8822

食体験や、おさんぽ会、マルシェなどを開催します。

●冬期休館のお知らせ

2026年12月16日（水）～2027年2月末日は冬期休館となります。

〈ちひろのことば目録〉

「いわさきちひろ ことば目録」（9月上旬完成予定）
A4判/160ページ/モノクロ/初版500部



ちひろが雑誌や新聞で発表した文章や詩と、日記や手帳などに綴ったことばは、現時点で280点確認されています。本目録では、そのなかから約160点を選び、できるだけ原文に忠実に全文を収録します。

CONTENTS <展示紹介>いわさきちひろと堀文子 童画の世界…②/絵本の舞台を訪ねて 赤羽末吉の日本一周…③/ちひろ美術館コレクション 波にゆられて舟の旅/<活動報告>ザ・キャビンカンパニーアーティストトーク・絵本づくりワークショップ「わたしのかいじゅう」…④/ひとことふたことみこと/美術館日記/新収蔵作品紹介⑥…⑤

美術館だより NO.121 発行2026年8月27日



安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原3358-24 TEL.0261-62-0772 FAX 0261-62-0774